

夏の企画展
肖像に見る
福島を築いた人々
福島県立博物館



「雪村自画像」(大和文華館蔵)



「相馬都胤像」(都玉神社蔵)



「橋本トメ像」



「保科正之像」(土津神社蔵)

夏の企画展はうつくしま未来博関連事業「肖像に見る福島を築いた人々 顔とすがたの人物誌」です。

近年の調査で広い県内には会津、中通り、浜通りの各地に多くの肖像画・肖像彫刻が伝わっていることが分かりました。実在の人物をモデルにした肖像画・肖像彫刻、そこには江戸時代の藩主、尊崇を集めた高僧、才能あふれる文化人ら全国的にも著名な福島の歴史を代表する人物はもとより、各地域の文化や産業、暮らしの発展に功績のあった、有名無名様々な人物の姿が写し留められています。

福島の歴史は、いうまでもなくそれらの先人たちによって創り上げられてきたものです。私たちの暮らす現在（いま）は、過去（むかし）の先人たちが築いてきた未来（あす）でもあるのです。写し留められた先人たちの姿を通して県内各地域で活躍した先人の人柄、功績を学び、次なる未来を築く糧にしたいと思います。

人の姿を写す。私たちはごく手軽にカメラやビデオのシャッター、ボタンを押します。でもかつては、人の姿を写すことは大変なことでした。そんな時代の福島に関わる人々の肖像画、肖像彫刻を通して「人の姿を写し、残す」という行いについても考えたいと思います。愛し、尊敬した、懐かしい人物の姿を「写し、残す」という行い。そこには様々な思いがあったことでしょう。残された肖像画・肖像彫刻からは、モデルの人柄・功績だけではなく先人の姿を描き、かたどり未来への励ましとした後世の人々の心情にも触れることができるのではないのでしょうか。

ごく一部ですが登場人物をご紹介します。

政治社会を築いた人々

狩野探幽筆「保科正之像」(土津神社蔵) 狩野常信筆「丹羽光重像」(大隣寺蔵)
「安藤信正像」(良善寺蔵)「相馬昌胤像」(興仁寺・都玉神社蔵)「寺西封元像」
「松平定信像」(福島県立博物館蔵)

文化人たち

「雪村周繼自画像」(大和文華館蔵) 遠藤田一筆「亜欧堂田善像」(石井雨考像)
「大原文林 自画像」 蒲生羅漢筆「小沼幸彦像」(田中東昌像)「佐久間庸軒像」

夏の企画展

肖像に見る福島を築いた人々 ー顔とすがたの人物誌

●会期 平成13年7月7日(土)～8月26日(日)



「伝 生田目周藏写真」明治時代前期
(浅川町・商人)



「若嶋久三郎錦絵」明治14年(1881)
(会津若松市蔵)(若松出身・大関)

こころを支えた人たち

「源翁禅師木像」(常在院蔵)「祐天上人名号画像」(最勝院蔵)「如活禅師木像」
「日舒上人自画像」(宥天法印即身仏)「パネル展示」(貫秀寺)

産業を築いた人々

「市原綱稠像」(内藤捨藏像)歌川国貞筆「渡辺半右衛門像」遠藤香村筆「林
和右衛門光治像画稿」橋本トメ像「中島藤右衛門像」

記念の肖像

小川芋銭筆「田代良雄像」鈴木宇吉奮戦開門図(木戸八幡神社蔵)「森妙全
像」(福島県立博物館寄託)「栗村家宴会図」



狩野常信筆「丹羽光重像」江戸時代初期

(一)本松市・大隣寺蔵 (二)本松藩主



「河野千代像」明治二〇年(一八八七)

(会津酒造博物館蔵) (会津若松・教導職)

■企画展(肖像に見る福島を築いた人々)は平成一三年七月七日(土)から八月二六日(日)まで開催しています。
■観覧料 一般・大学生四〇〇円(三三〇円) 高校生三三〇円(二九〇円) 小・中学生二六〇円(二三〇円) ()は二〇名以上の団体の場合の料金です。

※常設展を観覧する場合には、別に常設展観覧料が必要です。



「宗澤大権現遠藤宗忠像」を記する
画像をお祀りする地域の人々



近藤浩一路筆「山都絵日記」大正九年(1920)
(山都町・素封家・実業家・田代蘇陽)

企画展関連行事のお知らせ

○記念連続講演会

「肖像画研究の現在」

講師 黒田日出男氏(東京大学史料編纂所画
像史料解析センター長)

榎原 悟氏(群馬県立女子大学教授)

木下直之氏(東京大学助教)

日時 七月二五日(日) 午前一〇時三〇分より
午後三時三〇分

場所 当館講堂

○シンポジウム

「ふくしま その歴史・自然・未来」

パネラー 福島県知事 佐藤栄佐久

県立美術館長 酒井 哲朗

アクアマリン館長 安部 義孝

まほろん館長 藤本 強

県立博物館長 高橋 富雄

日時 七月二二日(日) 午後一時より午後三時
場所 当館講堂

○似顔絵講座

「似顔絵を描く 似顔絵師vsパソコン」

講師 松村宏氏(グラフィックデザイナー)

日時 八月一九日(日) 午後一時三〇分より

場所 当館実習室

○企画展示解説会

日時 七月七日(土) 七月八日(日) 七月二二
日(土) 八月四日(土) 八月五日(日)

八月一八日(土)

午後一時三〇分より

講師 当館学芸員

場所 当館企画展示室

講演要旨 企画展記念講演会

平成一三年四月二十九日(日)
平成一三年六月三日(日)

「古代人の多彩なメニュー―農民は米を常食としたらどうか」 「考古学から見た日本の食生活史」

講師 国立歴史民俗博物館副館長 平川 南氏
講師 奈良文化財研究所主任研究官 松井 章氏

古代人の多彩なメニュー

―農民は米を常食としたらどうか

平川 南氏

本日は企画展「食と考古学」に関連しまして、近年出土例が増加している古代の木簡や漆紙文書の内容から特にサブタイトルであります古代の農民が米をどのくらい、口にすることができたかを考えてみたいと思います。私が古代の食に興味を持ったのは米の品種名を記した木簡が発見されたことによります。現在まで二〇種類ほどの品種名を記した木簡が確認されていますが、その大半は会津若松市矢玉遺跡といわき市荒田目条里遺跡のもので占められています。これらの木簡が出土する遺跡は、いずれも地域の支配者の拠点と考えられている場所です。



す。これらのことから、多くの品種を少しずつずらして栽培していることと、稲作が支配者によって管理されていた、言い換えれば、政治と強く結びついていたことがうかがえます。

さて、農民の税を考える時に重要なものに「出挙」があります。最近の資料によれば出挙は強制的に男女の差なく、しかも複数かけられていた実態が明らかにされています。これらは農民の大きな負担となったことでしょう。

このようにしてみると、農民にとって、米は日常的に食べられるものではなかったと考えられます。これらの農民の苦しい生活は秋田城出土の死亡に関する帳簿からもうかがうことができます。「多彩なメニュー」とはぜひいたくとしての「多彩」ではなく、食べられるものは何でも食べた結果としての「多彩」であったということができます。

考古学から見た日本の食生活史

松井 章氏

私は学生時代に貝塚の調査に参加して以来、おもに動物の遺存体を分析することによって、その当時の食生活の特徴を明らかにすることを目的に研究を進めています。例えば、仏教の伝来以後、動物食は忌諱されていて、明治になって西洋文明の移入によって再び肉食がはじまったとする理解が一般的です。しかし、平城宮などではばらばらにされた骨がまとまって出土する場所があり、



建て前とは違って、これらが食料にされていたことは明らかです。また、近世の城郭の調査でも同様な例が確認されています。このような点は発掘調査によって実態としての「食」が明らかにされた例といえます。

また、食生活を考えるためには「残らないもの」が多く、その実態を明らかにするためには、資料の採取法や研究の方法の開発も重要です。現在縄文時代前期、粟津湖底遺跡における食料の種別の供給カロリー比率の研究を進めています。これによれば、植物質食料が重要な食資源であったことが分かります。縄文時代のサケの骨も住居内の焼土を細かく分析することで最近では内陸部の遺跡からの検出例が増えており、河川漁労の対象としてやはり重要であったと考えています。

また、各地、各地域のイノシシ骨について窒素同位体の分析を進め、イノシシが家畜として人間に飼われていた可能性を探っています。平城宮をはじめとするトイレ遺構の検出にも関わりましたが、今後このような新しい視点の研究が新たな資料の検出とともに食生活の実態の解明に大いに役に立つであろうと考えています。

(要約 藤原妃敏)

奉納絵馬と近代

猪巻 恵 民俗担当

絵馬とはもともと神社やお寺に祈願や御礼を込めて奉納する板絵のことです。今でも小絵馬を高校・大学の入試のシーズンに、志望校の合格を願って神社に奉納する風景をよく見かけます。このような板絵の形式をとる絵馬はすでに奈良時代には存在していたといわれています。

近世には芸術的色彩合いが高まり、江戸時代には祈願の他にも祭礼・武者絵・芸能・物語・生業・風景等々多種多様な画題が描かれ奉納されるようになります。また当時の風俗習慣を知る上でも貴重な資料といえることができます。

明治期になっても絵馬を奉納する習慣は続きました。この時期になると近世とは多少傾向の違った絵馬が製作されるようになります。日本国内の産業革命の進展によって生活の多くを自給自足によってきた農村は、工場機械織りによる綿衣料や各種工業製品が流入によって商品経済のなかに組み込まれ、人々の生活や意識も大きく様変わりします。そして近代国家形成期の対外戦争は、それまで「外国」をあまり意識せず、接触することの少なかった地方や農村の人々にあらためて国民国家としての「自国」を強く意識させる契機となりました。現在も県内に残る明治の奉納絵馬を中心に当時の人々の意識について少し考えてみたいと思います。

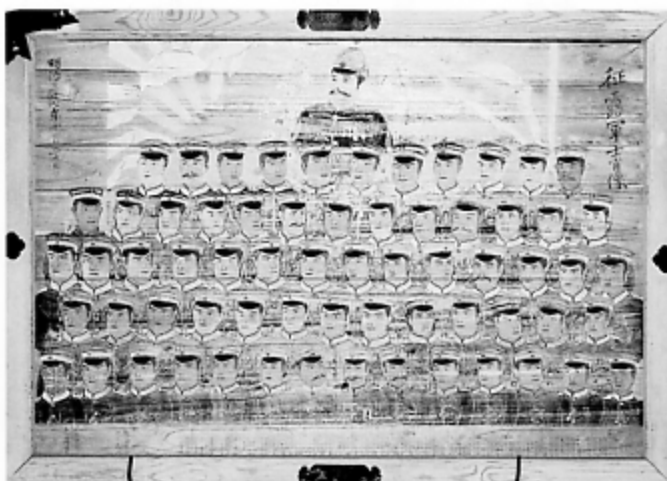
日露戦争（一九〇四―〇五）は、一九世紀末の日清戦争（一八九四―九五）と比較すると戦死・負傷者数は、一〇倍近い約二万人。軍事費は外国からの借入を含む約二〇億円（一九〇四年次の日本政府の国家予算規模が約三億円）と膨大なものでした。また軍事・経済力とも

に優勢な帝政ロシアとの対決による兵士の動員は全国津々浦々におよび県内も例外なく、多くの若者が中国東北部等の戦線に送り込まれました。

写真の絵馬は「征露軍士肖像絵馬」という題です。明治三十七年（一九〇四）に制作されたものです。描かれているのは須賀川・石川・岩瀬郡の村々から日露戦争に出征した将兵たちの肖像と思われまます。絵馬の端には画師の名前として「岡崎梅岳」と記名があり、また「山形県東田川郡東根町」の出身と記されています。梅岳はムサカリ絵馬奉納の習俗が盛んな山形県東根の出身であり、どのような経緯で絵馬を制作するに到ったのかは今となっては知る由もありませんが、村人による兵士たちの無事帰還を祈念するものには違いないでしょう。また、同じお寺には、「鬻河の先登大橋上等兵勇戦奮闘之実況之図」という戦闘を描いた絵馬も奉納されています。前作同様に岡崎梅岳の手によるものです。鬻河は中国と朝鮮半島の間に流れる鴨緑江（ヤール河）の支流で、日露戦争当初に中国東北部へ侵攻しようとする日本軍とロシア軍が衝突しました。この絵馬では、画面中央の渡河を終えた半裸の兵士が、小銃の台尻で今にもロシア軍士官を殴打しようとする芝居じみた構図からなっており、同じ絵師の作品ながら前作とは趣を異にしています。実際の鴨緑江の戦いで勝利は、大きく喧伝され軍事上の優勢よりも経済上の効果が大きく、当時ロンドンにあって戦費調達用外債の募集に当たっていた高橋是清（後の蔵相）は「この勝利によって外債の応募が殺到して戦費調達が好転した」として後に述懐しているほどです。日本国内でも勝利は大きく報道され、この絵馬からも「村の英雄」である出征兵士を誇り、戦勝に酔う当時の世相を絵馬から伺うことができます。

しかし、実際の日露戦争での日本の勝利は薄氷を踏むようなものであり、陸戦での兵員・兵站は枯渇し、アメリカの仲介でようやく講話にもちこんだのが実状でした。世界初の機関砲や連発小銃が使用された近代戦は、

その後の世界大戦を予言するような悲惨な戦闘の連続でした。絵馬からは近代国家の成立によって戦争というかたちで、徹視的に農村社会や人々が権力の末端に組み込まれていく姿の一端を垣間見ることができません。このような絵馬を含め県立博物館では、夏の企画展「肖像に見る福島を築いた人々 顔とすがたの人物誌」として、県内各地の多様な肖像や肖像彫刻が展示されます。皆様お誘いあわせのうえご覧いただければと思います。



征露軍士肖像絵馬（須賀川市白山寺）



征露軍士肖像絵馬（部分）

Q・・会津が昔海だったってほんとうですか？
A・・ほんとうです。海があった証拠が地層の中に残されています。

西会津地域の高郷村塩坪付近の阿賀川河岸は、貝類などたくさん海の化石が見つかることで有名です。この地層は塩坪層と呼ばれ、今からおよそ九〇〇万年前に浅い海底に堆積した砂や泥からなる地層です。塩坪層からはクジラやサメ、それに新種の海牛の化石も見つかっています。奥会津の只見町布沢に分布する同じ時代の地層からも、サメや海に棲んでいた貝類の化石が見つかっています。つまり当時会津のあちこちに海があった訳です。

塩坪に露出する地層は塩坪層中部にあたり、ここからはエゾバイ・ウバトリガイ・ワタチザルガイ・カガミガ

会津は昔

海だった

Q & A

竹谷陽二郎

回答者
自然担当

見つかっています。これらは淡水と海水が混じる汽水域に棲んでいる貝類です。河口付近の潟のような環境が想定できます。藤峠層中部になると海や汽水の環境を示す化石は見つからず、替わって木の葉の化石がたくさん見つかるようになります。つまり、塩坪層から藤峠層の化石の変化から、海が退きだんだん陸化していった様子うかがえます。このように地層に含まれる化石をたんに調べると、海だったかどうかだけでなく、海の深さも推定でき、環境が時間とともにどのように変わっていたかを復元することができます。

Q・・どうして海だったところが陸になったのですか？
A・・その原因は二つ考えられます。ひとつは海水面の高

さが低くなったこと、もうひとつは地殻変動により大地が隆起したことです。八〇〇万年前あたりから地球全体の寒冷化が進み、海水面が下がったことがわかっています。また、この時期に奥羽山脈の隆起が始まり、そのまわりの地域から次第に陸地となっていくことが地層に残された証拠から明らかにされています。従って、会津地方が陸地となったのは、この二つのことが同時に起こったためと考えられます。

イなどの仲間の貝化石が見つかり、それらから、塩坪層中部が堆積した当時の水深は五〇メートル前後であったことがわかります。塩坪層上部からは、タマキガイの仲間の貝化石が見つかり、その水深は三〇メートルより浅かったとされています。過去の生物をもとになぜそのような推定ができるかというと、同じ仲間の生物は、現在も過去も同じ環境（水温・深度・生活様式など）に棲んでいたという仮定を根拠にしています。たとえば、現在のウバトリガイは水深一〇〜五〇メートルの海底に棲んでいるので、ウバトリガイの仲間は過去においてもその深度に棲んでいただろうと推定する訳です。

塩坪層の上には藤峠層という地層が重なっています。この地層の下部からはアゲマキガイやシジミの貝化石が



ウバトリガイの化石
(高郷村塩坪層)



塩坪層の露頭
(高郷村塩坪阿賀川河岸)

シンポジウム開催！

うつくしま未来博の開催を記念するシンポジウムが開催されます。
参加者は知事と四つの博物館長。最強の布陣が語り尽くす文化福島二十一世紀の展望。
未来はここから始まる！
含蓄のある講演・報告。そして白熱のディスカッション。夏の午後は熱く燃える！

うつくしま未来博関連事業

シンポジウム

とき 七月二十二日（日）午後一時

ところ 県立博物館講堂（入場無料）

テーマ

「ふくしま その歴史・自然・未来」

パネラー

福島県知事 佐藤 栄佐久

「基調講演」

福島県立美術館長 酒井 哲朗

「風土と造形」

ふくしま海洋科学館長 安部 義孝

「福島の自然―人と自然の共生」

福島県文化財センター白河館長

藤本 強

「文化の接点としての福島」

福島県立博物館長 高橋 富雄

「未来を開く人たち」

パネルディスカッション

◎今度の秋の企画展

「武者たちが通る
―行列絵図の世界―」

参勤交代を中心に、江戸時代の武家の様々な行列を紹介する企画展です。

○参勤交代

入国や江戸登城は、大名行列の最大の見せ場です。弓・槍・鉄砲などの道具類や、殿様やお供の者たちの服装などを御覧ください。また、いろいろな行列絵図を見比べてみることで、それぞれの藩の行列の特色、大名がこだわった行列の演出の意図などを考えます。

○道中あれこれ

奥州街道沿いの福島、本宮、白河などを、東北諸藩の大名たちは参勤交代のために通過しました。大名の休泊した本陣宿札などを展示し、あわせて宿場や本陣でのさまざまなエピソードや道中の費用など行列の裏事情を紹介します。

○行軍

大名もれっきとした武士であり、大名行列も基本的には軍隊の行進です。蒲生氏郷の九戸攻めの行軍や、また江戸時代の諸藩の軍事演習との関わりで、相馬野馬追、会津藩追鳥狩の行列に関する資料を展示します。

（歴史担当 高橋 充）



会津藩主参勤交代図（会津若松市蔵）

■企画展（武者たちが通る）は平成一三年九月二日（土）から十一月一日（日）まで
■観覧料 一般・大学生三〇〇円／高校生一七〇円／小・中学生二〇〇円

常設展 歴史・美術テーマ展示

「戦国江戸初期の武家資料」
会期 六月五日(火)から七月二九日(日)まで
「幕末の会津 若松城下と会津松平家」
会期 七月三一日(火)から九月三十日(日)まで

講演・講座

◎野外講座
「化石をさがそう」(梁川町上川原広瀬川)
講師 当館学芸員 竹谷陽二郎
日時 八月四日(土)午後一時
「縄文土器をつくろう 野焼き」
(大川河川敷)
講師 当館学芸員 渡部昌二 伊藤知雄
日時 九月二四日(月) 振替休日 午前十時

◎実技講座

「虫かごをつくろう」
講師 技術伝承者 阿部吉致さん
日時 七月一四日(土) 午後二時
「縄文土器をつくろう 1」
講師 当館学芸員 渡部昌二 伊藤知雄
日時 七月二二日(土) 午前十時
「縄文土器をつくろう 2」
講師 当館学芸員 渡部昌二 伊藤知雄
日時 七月二二日(日) 午前十時
「縄文土器をつくろう 3」
講師 当館学芸員 渡部昌二 伊藤知雄
日時 七月二八日(土) 午前十時
「古文書入門 4 中世②」
講師 当館学芸員 高橋 充
日時 七月二八日(土) 午後二時
「古文書入門 5 中世③」
講師 当館学芸員 高橋 充
日時 九月二九日(土) 午後二時
「化石標本をつくろう」(梁川町)
講師 宮城教育大学名誉教授
増田孝一郎さん

当館学芸員 相田 優

日時 八月五日(日) 午前九時半

「草木染め 1」
講師 染織工芸家 山根正平さん

日時 八月二五日(土) 午前十時

「草木染め 2」
講師 染織工芸家 山根正平さん

日時 八月二六日(日) 午前十時

「おもちゃをつくろう」
講師 当館展示解説員 増子恵美

日時 九月八日(土) 午後一時半

「似顔絵講座」
講師 グラフィックデザイナー 松村 宏さん

日時 八月一九日(日) 午後一時半

「肖像画研究の現在」
講師 東京大学史料編纂所 画像史料解析センター長 黒田日出男さん

日時 七月一五日(日) 午前十時半

「肖像画に見る福島を築いた人々」
講師 当館学芸員 川延安直

日時 七月 七日(土) 八日(日) 二二日(土)

八月 四日(土) 五日(日) 一八日(土) 午後一時半

◎一般講座
「潮目の海の民俗」
講師 当館学芸員 佐々木長生

日時 七月二〇日(金) 海の日 午後二時

「福島の仏像 20」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

「福島の仏像 21」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

「福島の仏像 22」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

「福島の仏像 23」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

「福島の仏像 24」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

「福島の仏像 25」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

「福島の仏像 26」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

「福島の仏像 27」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

「福島の仏像 28」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

「福島の仏像 29」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

「福島の仏像 30」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

「福島の仏像 31」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

「福島の仏像 32」
講師 当館学芸員 若林 繁

日時 七月二二日(土) 午後一時半

日時 九月二五日(土) 敬老の日 午後一時半

金曜講座

場所 講堂 入場無料

二〇〇一年記念特別講座「徳一」

第一部 南都のころ

第七回 「法相・天台あべこべ論」

日時 七月一三日(金) 午後一時半

第八回 「法華経三乗智」

日時 七月二七日(金) 午後一時半

二〇〇一年記念特別講座「徳一」

第二部 徳一を育てた風土

第九回 「やまと奥の細道」

日時 八月一〇日(金) 午後一時半

第十回 「徳一ゆかりの仏像」

日時 八月二四日(金) 午後一時半

第十一回 「古寺巡礼その一 元興寺」

日時 未定

第十二回 「古寺巡礼その二 観音寺」

日時 未定

実演

場所 体験学習室 入場無料

「機織り」
染織工芸家 山根正平さん

日時 七月一五日(日)

「昔語り」
語り部 横山幸子さん

日時 七月二〇日(金)

「会津の唐人風づくり」
技術伝承者 鈴木英夫さん

日時 八月二二日(日)

「会津の唐人風づくり」
技術伝承者 鈴木英夫さん

日時 九月九日(日)

伝説技術実演

◎「檢枝岐の曲げ物づくり」
技術伝承者 星 寛さん

日時 九月二五日(土) 敬老の日 午後一時半

*開始時間の書いていない実演は、午前十時

半からと午後一時からの二回行われます。

うつくしま未来博関連事業

◎シンポジウム
「ふくしま その歴史・自然・未来」
パネリスト
佐藤栄佐久 福島県知事
酒井哲朗 県立美術館長
安部義孝 ふくしま海洋科学館長
藤本 強 文化財センター白河館長
高橋富雄 県立博物館長
日時 七月二二日(日) 午後一時
場所 講堂 入場無料
移動博物館
於 只見町 九月上旬(予定)

常設展無料開放日

八月二二日(火) 県民の日
九月二五日(敬老の日)

*夏季休業中以外の毎月第二・四土曜日は、
小・中学生に常設展示室が無料開放されま

す。

七〇九月の休館日

七月 二日(月)・九日(月)・一六日(月)・

二三日(月)・三〇日(月)

八月 六日(月)・一三日(月)・二〇日(月)・

二七日(月)

九月 三日(月)・一〇日(月)・一七日(月)・

二五日(火)

*八月二一日(土)より一六日(木)までは、午後

六時まで開館します。(入館は、五時半ま

で)